

# 絶対平和主義

— 非暴力の実践 —

1

## Overview

1. キリスト教の場合
2. イスラームの場合
3. 仏教の場合
4. 近現代における平和主義の実践者たち
5. 今回の課題

2

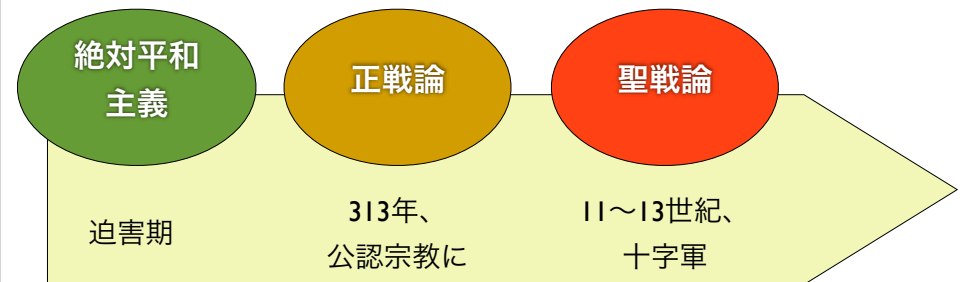
# 1

## キリスト教の場合

3

## 戦争論の三つの類型

キリスト教を基軸として



4

## 平和主義——概念の整理

- 絶対平和主義：「無条件」平和主義
  - 一切の問題解決を「平和的手段」（非暴力）によって行う。
  - 例：レフ・トルストイ（宗教的信念に基づく）
- 平和優先主義：「条件付」平和主義
  - 自由主義、功利主義（最大多数の最大幸福）などを思想的ルーツとする。
  - 例：バートランド・ラッセル（ナチスとの戦いを正当化）

5

## 最初期の教会

- 迫害時代においては、イエスの言葉に基づいた絶対平和主義（暴力の否定）が基本であった。
- ミラノ勅令（313年）以前にはキリスト者が戦争に行ったり、職業軍人になることはイエスの教えに背くこととして、また、**偶像崇拜**（=皇帝崇拜）に近づくこととして、是認されることはなかった。

6

## 根拠となったイエスの言葉

- 「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」（「マタイによる福音書」 5:38-39）
- 「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」（「マタイによる福音書」 5:43-45）

7

## アガペーの中の暴力性

- 「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っ  
てはならない。**平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ**。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」（「マタイによる福音書」 10:34-37）

8

## 平和主義から正戦論へ

- 「コンスタンティヌス体制」（313年、ミラノ勅令）以降、絶対平和主義の考え方は、徐々に主流から傍流へと移行していく。
- アウグスティヌスが正戦論の基礎を築く。
- 絶対平和主義は、ワルド派、カタリ派、メノナイト、クェーカーなどの少数派を通じて受け継がれていく。

9

## 絶対平和主義の影響を受けた人物

- マハトマ・ガンジー（1869-1948）：ヒンドゥー教徒。トルストイや新約聖書から影響を受ける。
- マルチン・ルーサー・キング（1929-1968）：ガンジーから影響を受ける。
- 内村鑑三（1861-1930）：終末論的平和と非戦論との結合。
- 安部磯雄（1865-1949）：新島襄より洗礼を受ける。同志社から早稲田へ。非戦論と小国主義。
- 柏木義円（1860-1938）：『上毛教界月報』を中心に非戦論を主張。

10

## 信仰の要請として絶対平和主義を 理解する神学者

- J.H. ヨーダー、S. ハワーワス
- プラグマティックな理由から非暴力を選択することを拒否する。その効果の如何に関わらず、キリストに従うことを求める。暴力を拒否することによって、たとえ多くの死者が出たとしても、キリスト者はそれに荷担すべきではないと考える。

11

## 正戦論からの絶対平和主義への批判

- ラインホルド・ニーバー（*Christianity and Power Politics*, 1940）
  1. プラグマティックな絶対平和主義者は人間の罪の深さを認識していない。
  2. 新約聖書における無抵抗の戒め（マタイ5:39）は非暴力的に抵抗することとは異なる。
  3. 抵抗しなくても専制政治は自ら滅ぶと考えることは歴史的事実に反する。



12

# 2

## イスラームの場合

13

## 共同体の防衛

- イスラームの現実主義と絶対平和主義とは相容れない。
- ムハンマドは、マッカ（メッカ）の多神教徒軍と戦って勝利した最初の大規模な戦いであるバドルの戦い（624年）以降、自ら20回あまりの戦いに参戦している。つまり、イスラームの場合は、その最初期から共同体の形成と数々の戦いとは密接な関係にあった。

14

キリスト教が、ローマ帝国という強大な国家権力とその迫害のもとで、絶対平和主義の立場を取っていたのに対し、イスラームの場合、最初から、マディーナ（メディナ）を中心としたイスラーム国家の形成と信仰共同体の拡大とが不可分の関係にあり、そもそも国家と宗教の二元論的な関係が存在していない。そのような意味でも、キリスト教の最初期に見られたような絶対平和主義はイスラームには存在しないと言えるが、そのことによってイスラームを好戦的な宗教と評価すべきではない。

15

# 3

## 仏教の場合

16

## 不殺生

- 釈迦の言葉（パーリ語聖典より）  
「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくられて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」（『ダンマパダ』129）  
「すべての者は暴力におびえる。すべての（生きもの）にとって生命は愛しい。己が身をひきくられて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」（『ダンマパダ』130）  
（中村元訳『ブツダの真理のことは・感興のことは』岩波書店、1978年）
- 仏教は「不殺生」（アヒンサー）、「非暴力」の伝統を持っているが、仏教は戦争と無縁であったわけではない。

17



18

## マハトマ・ガンディー（1869～1948）

- 1893年、訴訟事件の依頼で南アフリカに渡る。そこに働くインド人年季契約労働者の市民権獲得闘争を指導することとなり、自ら「サティヤーグラハ」（真理の把握）と名付ける大衆的非暴力抵抗運動を成功に導く。
- 1915年、インドに戻る。
- 1917年、ビハール州チャンパーラン県でのインディゴ(藍)小作争議、翌年グジャラート州アフマダーバードの繊維労働者の争議を「アヒンサー」（非暴力）の原則を貫徹して解決。
- 1930年、イギリス行政の象徴である塩税の侵犯（塩の行進）に始まる第2次サティヤーグラハ闘争を指導。
- 1948年、狂信的ヒन्दゥー主義者の手によって暗殺。

19

## マーティン・ルーサー・キング（1929～1968）

- 1955年、モンゴメリーのバス・ボイコット運動を指導。56年、連邦最高裁判所が公共輸送機関での人種差別を禁じる。以降、南部キリスト教指導者会議(SCLC)を組織、非暴力運動を推進する。
- 1959年、インドをおとずれ、ガンディーが追求した大衆的非暴力抵抗運動をより深く理解する。
- 1963年、ワシントン大行進「私には夢がある。いつかジョージアの赤い丘で奴隷の子孫と奴隷所有者の子孫が兄弟として同じテーブルにつく夢が」
- 1964年、ノーベル平和賞受賞。
- 1968年、暗殺される。

20

## (比較) マルコム X (1925-1965)

- キング牧師らの非暴力主義による黒人運動に反対し、暴力による権利獲得をめざした。
- 1946年、強盗罪で刑務所におくられたマルコムは、服役中、ネーション・オブ・イスラムの教えに触れる。
- 1960年代初頭、ネーション・オブ・イスラムのもっとも有名なスポークスマンとなる。
- 1964年、ネーション・オブ・イスラムを脱退。メッカを巡礼。
- 1965年、暗殺される。



21

## 内村鑑三 (1861~1930)

- 日清戦争のときには、それを「義戦」と見なす主戦論者であった。また、キリスト教は明治政府の近代化政策を補完する役割を果たすことができると考えていた。
- しかし、戦争に勝った結果、日本の植民地主義政策の中に内村が見たのは、利権を拡大しようとする帝国主義的拡張政策であった。つまり、義戦ではなく単なる侵略戦争に過ぎなかった実態を知ることによって、彼の戦争に対する理解は大きく転換し、新約聖書の思想やクェーカーの思想の影響を受けて、**非戦論者**としての立場を明確にしていく。

22

## 内村の非戦論 (1)

「若し戦争はより小さな悪事であって世には戦争に勝る悪事があると称へる人がありまするならば其人は自分で何を曰ふて居るのかを知らない人であると思います、戦争よりも大なる悪事は何でありますか、……悪しき手段を以て善き目的に達することは出来ません、……平和は決して否な決して戦争を透うして来りません、平和は戦争を廃して来ります、……」(内村鑑三『非戦論』岩波書店、1990年、63-64頁)。

23

## 内村の非戦論 (2)

「「非現実的なまぼろしにすぎない」とあなたがたはいうだろう。しかし、あなたがたのいう武装した文明というのは、現実的であったか。自らその非現実性を証明したのではなかったか。むしろ、武装しない平和こそ、唯一可能な平和ではないのか。……ああ、私の愛する祖国は、その未経験な明治時代の政治家の指導のもとで、この文明とはいえない西洋文明を、そっくりそのまま受け入れてしまったのだ！」(A New Civilization, The Japan Christian Intelligencer, 1926.4.5)

24

## アジア・太平洋戦争期における 無教会の中の葛藤と対立

- 黒崎幸吉（1886-1970）
- 非戦論を貫く。聖書の注解書を著す（直解主義的な解釈）。
- 塚本虎二（1885-1973）
- 非戦論から戦争容認へ。「大東亜戦争」を「聖戦」として肯定。戦後は絶対平和主義を主張。
- 矢内原忠雄（1893-1961）
- 戦争批判を貫く。天皇への熱烈な親愛。天皇を平和主義者として理解する。

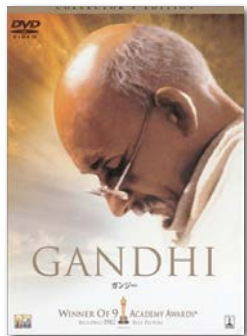
25

## 【参考文献】

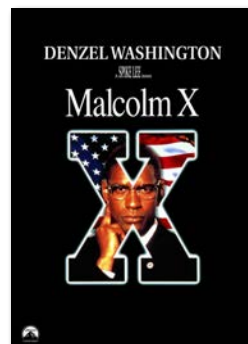
- ジョン・ハワード・ヨーダー『愛する人が襲われたら——非暴力平和主義の回答』新教出版社、1998年。
- 松元雅和『平和主義とは何か——政治哲学で考える戦争と平和』中央公論新社、2013年（中公新書）。
- 上坂昇『キング牧師とマルコムX』講談社、1994年（講談社現代新書）。
- 内村鑑三『非戦論』（内村鑑三選集2）岩波書店、1990年。

26

## 【参考映画】



「ガンジー」（1982年）



「マルコムX」（1993年）

27

# 5

## 今回の課題

- 『一神教とは何か』第四章「2 絶対平和主義」を読んでください。
- 絶対平和主義の立場に立つことは容易ではないことを歴史が示しています。上記箇所の内容も踏まえながら、絶対平和主義が持つ有効性と限界について、あなたの意見を述べて下さい。

28